



日本レイ・アームストロング協会 ワンダフルワールド通信 No.77

日本レイ・アームストロング協会 (ワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション=WJF) 2013年6月発行
〒279-0011 浦安市美浜 4-7-15 WJF 事務局 Tel.047-351-4464 FAX047-355-1004 Email: saints@js9.so-net.ne.jp

ホームページ <http://members3.jcom.home.ne.jp/wjff/>
発行人 代表・外山喜雄 編集長・山口義憲 編集・小泉良夫

世界一盛り上がった!? 日本の4. 30『国際ジャズ・デー』

サッチモを愛するトップ・プレーヤーが外山夫妻を祝福

“日本のジャズ”を本場で披露した原信夫さん、世界の日野皓正さん…

ジャズを愛する人たち、サッチモが大好き、やっぱりデキシーだよなあ、というファン…それよりなにより外山夫妻の人柄にとことん惚れ込んでいるみなさんが、会場を埋め尽くしてくださった。GW 谷間の4月30日(火)、日本レイ・アームストロング協会の“緊急例会”として開催された「外山喜雄・恵子夫妻の国際戦略大臣表彰記念 4. 30ユネスコ国際ジャズ・デー参加コンサート『映像とトークとライブセッション』」(主催:お祝いする会、WJF 後援:アメリカ大使館)米大使館の文化担当外交官もお見えになって、国際ジャズ・デーを盛り上げる。会場の東京・渋谷の渋谷区文化総合センター大和田「伝承ホール」は、このイベント発表早々に“全320席完売”の素晴らしいイベントとなった。それにしても、世界中でこの会場ほど「国際ジャズ・デー」にふさわしく盛り上がったところがあったのだろうか? サッチモをこよなく愛する日本のトップ・プレーヤーが一堂に会した。1967年、日本人バンドとして始めてニューポート・ジャズ祭に参加し、“日本のジャズ”で本場のファンの度肝を抜いた「シャープス&フラッツ」のリーダー、原信夫さん(86歳!)が来られて“秘話”の数々を披露。コンサートでは、何とあの世界的な名トランペッター、日野皓正さんがサプライズの突然飛び入り! ど迫力の演奏で会場を燃え上がらせた…そんな感動的なWJF“緊急例会”を再録、お届けしましょう。(小泉良夫)



日野さん(写真上中央)も交えて会場を巡ったセカンドライン。中川ヨウさん(下段左端)の司会で会場から祝福の喝采を浴びる外山夫妻=写真下の左。原信夫さん、瀬川昌久さん、中村宏さん…日本のジャズを支える大御所のみなさん=写真下の右、左から

これこそ世界に飛ばたく日本のジャズメンの「国際ジャズ・デー」

現地でも「外山夫妻はまさに「サッチモの大使」なんです！」

アメリカ大使館も全面協力、文化担当の外交官も流暢な日本語でエールを送る

素晴らしい小冊子が直前に到着！ 「アメリカン・ビュー」入場者に配布

午後6時開場、6時半開演。もう5時過ぎから熱心なファンが顔を見せる。WJFスタッフやご家族のみなさんまで、プログラムや会報75号、76号、記念品の封筒詰めに精を出す。お祝いの生花、祝電が次々と届けられる。後援していた



ただいたアメリカ大使館作成の外山夫妻を特集した素晴らしい小冊子『AMERICAN VIEW』(特集 JAZZ CONNECTION 日本のサッチモが繋いだニューオーリンズと日本の絆)が、作成にあたった広報・文化交流部のスタッフの手で開場寸前にどさっと届けられた。まるで素晴らしいジャズ雑誌みたい

写真、●面に詳細掲載。これも入場者全員に行き渡るようにプログラムともども同封される。すでに大使館のWEBにも掲載され、日本語版もアップされました。

<URLは下記>

<http://amview.japan.usembassy.gov/>

中川ヨウさんの華麗な司会で開幕 中村宏さん「夫妻は日米の架け橋」

さあ、中川ヨウさん(慶應義塾大学特任准教授)の司会で幕が上がる。中川さんは、会報76号でもご紹介したジャズの資料館、同大学の『アートセンター油井正一アーカイヴ』の設立にも、大変な貢献をなさっている方で、ジャズの催しには、欠かせないとってもステキなレディ。彼女の紹介で外山夫妻がステージに出て、この「お祝いする会」代表発起人の1人、中村宏さん(医学博士、ジャズ評論家)が、外山夫妻の国家戦略大臣表彰にもあった『「国境を越えた情熱」をもって頑張る日本人』を引き合いに出し、「ジャズという文化を通じて“日米の架け橋”になった夫妻」と



称える。「もっと早くやりたかったのですが、外山夫妻が、シャイというか、お忙しいとかで、延び延びになってしまった」と中村さん。

米大使館のリチャード・メイさん 「音楽は世界共通の言葉です」

超多忙の中、お祝いに駆けつけてくれたアメリカ大使館の文化交流担当官、リチャード・メイさんは、流暢な日本語



で挨拶。「私はニューヨーク生まれで、ルイの自宅があるクイーンズ区の3^{丁目}ほどのところの出身なんです。小さいときからジャズが好きでした。いま、

私も外交官となって、ルイが“サッチモ大使”として世界を回ったことを素晴らしいことだと思っています。音楽は、ほんとうに“世界共通の言葉”なんですね」と。

外山夫妻とも親交のあるニューオーリンズ市会議長、ジャクリン・クラークソンさんは常々こう、おっしゃっていました。「外山夫妻は、まさに“サッチモの大使”です」。

その“原点”ともなったサッチモの外交官ぶりが、CBSテレビ・ドキュメンタリー番組『サッチモは世界を廻る』(原題=Satchmo the Great)となって、会場に流される。WJFの例会でも紹介された外山さんのジャズ映像コレクションからのものだが、今回は、鮮明にデジタル化され、本邦初の日本語の字幕まで付けられた。その内容は――。

『サッチモは世界を廻る』上映 デジタル化し日本語の字幕も

<1956年9月末、ルイ・アームストロングとオールスターズは、スイス、ドイツ、ベルギー、スウェーデン、フランス、イタリ



ア、そして、はじめてのスペインも入れて、10カ国を廻る3ヵ月間のヨーロッパ・ツアーに出発した。ヒコーキの中のルイとバンド。「西暦紀元前218年、ハンニバル(地中海に面した古代国家、カルタゴの将軍)は37頭の



象と12,000頭の騎馬を率いてアルプスを越えた。ルイ・アームストロングは20世紀半ば、トランペットを抱え、5人の演奏家を率いて同じアルプスを越えたのである」…CBSのニュースキャスター、エドワード・R・マローの壮大な語りのイントロで始まる。『南部の夕暮れ』がバック

に流れる。

サッチモはまた、1956年5月、曾祖父母の出生地であるガーナにも廻った。空港で盛大な出迎を受け、当時のエンクルマ首相の前でも演奏する。ガーナでのコンサートには、10万人もの聴衆が押し寄せたという。ガーナの学校でサッチモが子供たちに話しかけ、トランペットをプレゼントするシーン。そう、このシーンこそ夫妻の脳裏に強く焼き付けられ、活動の出発点ともなっているシーンなのだ。

映画の最後は、サッチモのもう一つの夢、ニューヨークのルイゾン・スタジアムで行われた有名なゲーゲンハイム・コンサートで、(髪も真っ黒な!)若きレナード・バーンスタインが指揮するニューヨーク・フィルハーモニックの88人とともに、『セント・ルイス・ブルース』を演奏した映像。

2万5千人の聴衆の中には、83歳で盲目となっていたこの曲の作曲者で“ブルースの父”、W・C(ウィリアム・クリストファー)・ハンディの姿があった。演奏を聴き、涙ぐむハンディ…。バーンスタインは聴衆に向かって、こう語りかけた。「私たちが演奏する『セント・ルイス・ブルース』は、彼の演奏をまねてやったものに過ぎません。彼の演奏こそ、真実に満ち、誠実でシンプルなもの、気高ささえあると思います。彼がトランペットを唇に当てた時、たとえ練習のためであっても、そこに魂が打込まれているのです。彼こそ音楽にすべてを捧げた人物であり、私たちこそ、共演できたことを光栄に思っているの



す」>。

まさに「音楽大使」としてのサッチモの姿を追った迫真のドキュメンタリー。前号でもご紹介したが、ジャズが以前にも増して記者たちの目にもとまり、『ニューヨーク・タイムズ』紙は、「アメリカの秘密兵器は、マイナー・キーの中のブルー・ノートである」と書いた。「いまや、その最も効果的な大使はルイ・(サッチモ)・アームストロングである」と。

「今後、全編の完全字幕版も…」 外山夫妻の“原点”、夢は膨らむ

今回のイベントで上映されたのは全62分の一部をカット、38分に短縮したものだが、外山さんは、これを“完全字幕版”

として復元し、「今後、ジャズの研究が盛んな大学のジャズ・サークルやビッグバンド、さらには多くの若い方々に映画を見ていただく機会を作って、良き時代のジャズと、サッチモの素晴らしさを知っていただく活動につなげていきたいと思っています」と話している。またの機会をお楽しみに。

その夫妻の日本ルイ・アームストロング協会での“サッチモの大使”ぶりがスライドと映像も交えて紹介される。1967年(昭和42年)12月30日、移民船「ブラジル丸」で米へ。船上でバンジョーを弾く恵子さんに、会場から「かわいい!」の声。長髪の外山さん、黒髪ふさふさ…。サッチモが亡くなった日、ニューオーリンズにいた夫妻、サッチモの“ジャズ葬”フィーバー、

ニューオーリンズの子供たちに楽器を手渡す夫妻、ニューオーリンズからお返しのできた楽器が、東日本大震災の被災地に届けられた日、ニューオーリンズからのバンドの来日、被災地のジュニアジャズバンドとの交流…。 “サッチモ文化”は果てしなく広がる。来年は1994年(平成6年)7月、日本ルイ・アームストロング協会(WJF)発足から20周年を迎える。



発起人の中村宏さんご夫妻とも親交が厚い、ニューヨーク在住のジャズ歌手、ヘレン・メルルさんはじめ、みなさんからの祝電が披露された。ヘレンさんからの英語の一部を翻訳してご紹介。

<外山さんご夫妻が素晴らしい賞を受賞されたことをとてもうれしく思っています。音楽と世界の子供達を心から

愛していच्छる外山夫妻とお友だちであることは、本当に素晴らしいことです。できましたら会場に駆けつけて、大臣表彰をお受けになったお二人のステキな笑顔を拝見したいと願っております。でも、またもうすぐまたお会いできますね> (今夏も「サッチモの旅」で夫妻は中村夫妻とともにニューヨークへ向かいます)

日本のバンドで始めて世界最大の「ニューポート・ジャズ祭」に参加
「シャープス&フラッツ」リーダー、原信夫さんが登板！
これこそ「国際ジャズ・デー」日本のメインイベントとなる歓談

**1ドル=360円の時代の渡米
持ち出しも1人=500ドルまで**

休憩を挟んで、さあ、いよいよ原信夫さんの登場。ステージ左のテーブルに外山夫妻と中川さん、右に原さん、瀬川さん、中村さんが着席して、まさに国際ジャズ・デーにふさわしい歓談が始まる(写真下)。

1967年、日本人バンドとして始めてニューポート・ジャズ祭に参加し、“日本のジャズ”で本場のファンの度肝を抜いた「シャープス&フラッツ」のリーダー、常に日本のジャズ界をリードしてこられた原信夫さん。アメリカから打診があって参加はすることにはなったが、すべて自前とのこと。

「当時は1ドル=360円、1人500ドルしか海外に持って行けない時代でした。みんな初めての海外旅行なので、楽しんで貰いたいし…」それを原さんが必死にやりくりして一人でカバーした。6月29日、いよいよ羽田出発となって、タラップで記念撮影までして乗り込んだが、予想以上に楽器の荷物が重くてヒコーキ(当時はDC7)が飛べない。楽器を降ろすわけにはいかない。苦肉の策で燃料をその分だけ減らしてしまった。1時間以上も遅れでやっと出発。燃料を減らした分だけ給油のため途中あちこちに立ち寄る。ウェーキ島、ホノルル、ロサンゼルス…やっとなニューヨーク。それからまた、延々とバス旅行。ニューポートについてのは、ぎりぎりのリハーサル前。みなさんかちかちに緊張していたという。

**『さくらさくら』などすべて日本の曲
“人間国宝”の尺八奏者も加わる！**

ところで問題は演奏する曲目。アメリカでは、個性がなければ、まったく認めて貰えない。だから既成のジャズの模倣などは何としても避けたい。そんな秘話を原さんが次々と披露していく。

1966年からコーネル大学に留学していたという中村さん。「フェスティバルに日本のジャズバンドが来ると言うことで、聞いてみたら、えー！『シャープス&フラッツ』？」と

言うことで、会場に駆けつけた。「確か、演奏された曲の中に『さくらさくら』がありましたねえ」と。

「そうなんです。あの時は日本の曲ばかりやったんですよ」と原さん。そのあたりの事情は、『シャープス&フラッシュ物語～原信夫の歩んだ戦後とジャズ～』(長門竜也著、瀬川昌久監修＝小学館)に詳しいが、

『さくらさくら』は前田憲男の渾身の編曲でオープニングを飾った。ほかに『越天楽』『ソーラン節』『箱根馬子唄』、後に人間国宝となった尺八奏者の山本邦山をフィーチャーした『十段(みだれ)』(山本さんは「おお、いいよ、行くよ」と二つ返事で快諾してくれたという。「嬉しかったですねえ」と原さん)、原さん自身の作『古都』も演奏された。聴衆を飲み込み、スタンディング・オーベーションを受けるほど



羽田空港でさあ出発…ところが…(写真左)と、
ニューポートでの「シャープス&フラッツ」(同上)

の大成功を収めた。それが、地元はもちろん、日本にも大反響となって伝わった。

もちろん帰国後、直ちに収録され『ニューポートのシャープス・アンド・フラッツ』(日本コロムビア=YS10013)としてリリースされた。

このニューポートの出演が原さんにとっての初めての海外への演奏旅行だったが、その後、東南アジア6カ国、インド、ソビエト公演…1982年(昭和57年)には、モントレー・ジャズ・フェスティバルにも出演している。それらの思

い出の写真が、スライドで会場に流される。まさに「国際ジャズ・デー」にふさわしいトーク・ショーとなり、原さんの独壇場。瀬川さん、中村さんが、話される機会がほとんどありませんでしたね。

この1967年のニューポートへ同行した現デキシーセイন্ツのレギュラーメンバー、鈴木孝二さんがステージに招かれた。「私が4月、シャープス&フラッツに入ったばかりの年なんです。向こうでは右も左も有名な人ばかりでしたよ」と。

世界で活躍している日本のジャズメンが続々と登場 何と！あの日野皓正さんもサプライズ出演 ど迫力の演奏に出演者も会場也大ヒーバー

セイন্ツメンバーも豊富な海外公演 ゲスト出演も錚々たるメンバーが揃う

トークの後は、ライブセッション。まずはホストバンドの外山喜雄とデキシーセイন্ツ。外山喜雄(tp,vo)・恵子(p,bj)この鈴木孝二(cl)、シャープス&フラッツとソビエト公演に同行している粉川忠範(tb)、ニューオリンズの「サッチモ・サマーフェスト」10年連続出演の藤崎羊一(b,tuba)、モンタレージャズ祭ほか海外公演多数のサバオ渡辺(ds)、それにセイন্ツのメンバーとして何度も「サッチモ・サマーフェスト」に参加、シャープス&フラッツのソビエト公演はもとより日本のビッグバンド3つにも参加して広津誠(cl,ts)…改めて紹介することもない、みなさん錚々たるメンバー。

それにゲスト出演の中川喜弘(tp=デキシー・ディックス)、筒井政明(tp=デキシー・キングス)、下間哲(tp=デキシー・ジャイブ)、花岡詠二(cl=スキング・オールスターズ)、菌田勉慶(tb=デキシー・キングス)…海外出演のベテラン、リーダー格の華やかな顔ぶれが出そろった。

セイন্ツの『明るい表通り』に始まって、全員による『バーベキュー料理で踊ろうよ』、トランペッター4人の『この素晴らしい世界』、クラリネット3人の『アバロン』、トロンボーン2人をフィーチャーした『セント・ジェームズ病院』、「国際ジ

ャズ・デー」に寄せて恵子さんのバンジョーをフィーチャーした『世界は日の出をまっている』…そんな中でサプライズ。日野皓正さん(tp)が突然、予定もなく駆けつけてくれたのです。これには、ステージはもとより会場也大ヒーバー。ド



まずはセイন্ツ(写真上)、そして、出演者全員(同中段)、さらに、日野さんがサプライズ出演(同左)

迫力の演奏が続く。『ベイズン・ストリート・ブルース』に続いて、フィナーレの『聖者の行進』では、日野さんも加わって全員会場を回る。この日、助っ人に駆けつけてくれたスタッフで WJF のアイドル、伊藤咲子さん(ts)が、興奮気味に発する。「日野さんってセクシー！」。そう、その言葉につきますね。

このフィナーレの前に、この日の発起人の1人、佐藤修さん(元ポニーキャニオン社長、サッチモ・グッズの世界的コレクター)がお礼のご挨拶とひと言(左



の写真の左)。「この活動が20年も続いていることは、ひとえに外山夫妻の誠実で真面目なお人柄の賜物…」と、

エールを送った後、「今度は若い人を連れてきて欲しい…」。そう、この日も、結構ご年配の方々が多かったですからね。来年の WJF20周年に向けて、これは、最大の課題なんです。続いて磯野博子さん(ジャズ評論家、故いソノてルヲ氏夫人)から夫妻に花束が贈られた(上の写真の右)。外山夫妻の大臣表彰を祝い、「国際ジャズ・デー」を謳歌する素晴らしいイベントだった。